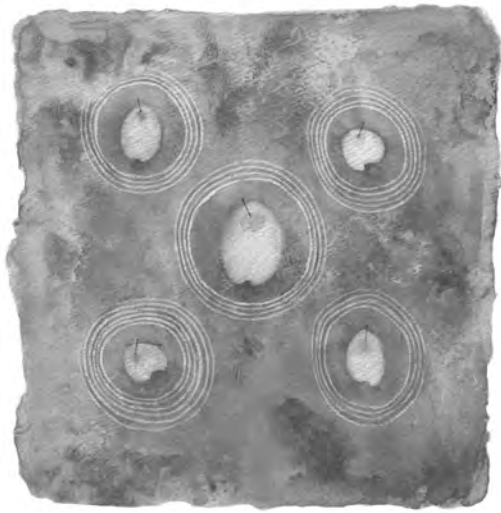


# 田舎ではこれからの社会に 対応するための学習ができるのか？

真庭市教育委員会教育長

三ツ 宗 宏



先日、高校生からこんなタイトルのレポートが届いた。レポートによると、これからの社会で求められる力は、決まった目標を要領よくこなす力ではなく、自分で考え自分の言葉で表現する力、価値ある目的を考え人とつながる力であるという。

真庭市では、高校生が集まって小学生を対象とした学習会を毎週開催している。レポートを届けてくれた高校生は、その学習会を主催するメンバー。

高校生の問いへの答えを考えてみる。そして、「できる」いや、「田舎が教育の最先端」と言いたい。

田舎は、日本が直面する高齢化人口減少の姿をすでに体現している。子どもを育むことと地域を育むことが不可分の課題として顕在化している。それだから、子どもの成長に多くの大人の関わりが生まれる。子どもたちは様々な考え方や価値観に触れ、今の学びと地域の未来を重ねて考えることができる。

田舎には豊かな自然がある。自然は情報と発見の宝庫である。遊びの中で自然のやさしさや厳しさを体感し、感性を磨くことができる。

地域には答えのない問題がたくさんある。それについて対話して考え、価値ある目的を描き、子どもも大人もつながって活動する学びができる。

利便性は都会に劣る。だからこそ、自分で考え言葉で伝え、人とつながって工夫する楽しさがある。

ないものも多い。だからこそ、知恵を寄せ合って生み出す喜びがある。

もちろん、教育は意図的に行われる必要がある。その営みの中に、田舎に「あるもの」「ないもの」も生かすことで、学びの質は高まっていく。田舎は高校生が描いた「これからの社会に対応する力」を育む可能性に満ちている。

変化の激しい時代。これだけで教育が完結することはない。子どもたちが学ぶべきことはたくさんある。そうでありながらも、妙に力むことなく、学校は教育課程を通じて田舎を生かし、地域は日常を通じて子どもと共に田舎を楽しむ。

そんな豊かさがあってもいい。